

学校同和教育の実践

—保護者と同和問題を語り合う関係作り—

足利市立西中学校
”

柏瀬和彦
石原正夫

1 ねらい

学校同和教育の継続的実践に取り組みながら、保護者と同和教育・同和問題を語り合う関係作りを目指す。

2 職員の意識の把握

(1) 全職員の同和問題・同和教育に対する意識を把握するためのアンケート調査

ア アンケートの内容

同和教育・同和問題について日頃から考えていること、疑問等書いてください。

イ 寄せられた主な意見

① 部落差別の実態を知りたい

・今、部落差別はどのような形で残っているのか。

② 被差別部落出身者の考えや願いを知りたい

・部落差別をなくすためにどのような取り組みをしているか。

・子供の教育にどのような願いがあるか

・被差別部落出身の子供は、部落出身をどのように考えているか。

③ 被差別部落の歴史的背景を知りたい

・歴史的背景や今も部落差別が残る理由を知りたい。

④ 学校同和教育の取り組みについて

・同和問題をどのように生徒に指導したらよいか。

・同和教育と人権教育のつながりをどのように考えたらよいか。

⑤ 保護者啓発のあり方について

・「寝た子を正しく起こす」にはどうすればよいか。

・定期の家庭訪問では同和教育の啓発をする時間が足りない。

(2) アンケート調査結果から把握できる課題

ア 同和問題に対する認識を深める継続的研修が必要

・被差別体験者との交流

・同和問題の歴史的背景を学ぶ研修

イ 同和教育＝教育の本質について常に確認していく研修が必要

・指導内容・方法の工夫・改善

・保護者啓発のねらいの確認，方法についての工夫・改善

3 教職員研修の実施

日時； 8月19日(月) 11：00～16：00

内容；1 同和問題についての学習会

- ・社会科の教科書に出てくる同和問題
- ・部落差別の現状

2 同和問題・同和教育について職員の小集団での話し合い

3 西中の被差別部落出身保護者を囲んでの話し合い

(1) 同和問題についての学習会 11：00～11：20

ア 社会科の教科書に出ている同和問題

講師：石原同和教育主任

テキスト：社会科における同和問題に直接かかわる内容の指導のポイント

①歴史的分野

- ・身分制度の成立
- ・百姓一揆と差別の強化
- ・渋染一揆
- ・解放令
- ・全国水平社
- ・同和对策審議会答申

②公民的分野

- ・現代社会に残る差別

イ 部落差別の現状

講師：小口校長

①差別ビラにみえる部落差別：葛生町の2枚の差別ビラから

②差別落書きにみえる部落差別：JR宇都宮駅に張り出された差別落書きから

③足利市における部落差別：小中学校の同和教育研修会で報告される差別事象

(2) 職員の小集団での話し合い 11：20～12：40

○5グループ 1グループ7～8名 ○話し合いの中で出された主な意見

ア 差別の実態がよくわからなかった。今も残る具体的な事例を学習して、なるほどこんなひどい差別が残っているのだから同和教育をもっと積極的に行わなければならないと思った。

イ 差別の実態を知らなかった自分の勉強不足が身にしみた。

ウ 話し合いの中で、自分の知らないことがたくさんあることを知った。同和問題を考えるよいきっかけになった。

エ 分町問題について初めて知った。

オ 問題の根の深さをまた感じた。教育の大切さを改めて思う。

カ 先生たち一人一人の同和問題に取り組む姿勢がうかがえて意義ある研修だった。

キ 歴史や公民の記述を勉強できてとてもよかった。

ク 生徒が教科書でどのように勉強しているか知ってとてもよかった。

ケ グループ研修はざっくばらんに話ができとてもよいと思った。

コ 他の人の意見や考え方を知ることは大切なことだと感じた。

(3) 被差別部落出身保護者を囲んでの話し合い 14:00～16:00

出席者

西中の被差別部落出身保護者 4名

西中卒業生の被差別体験者 1名

形態

学年別 3グループ

○話し合いの中で話題となったこと

- ア 被差別部落出身者として被差別部落・部落差別をどのように受け止めているか。
- イ 結婚するときどのような問題がおこったか。それをどのように受け止め、どのようにして乗り越えてきたか。
- ウ 分町問題はどのような経過ででてきた問題か。今はどうなっているか。子供はどのように思っているか。
- エ 子供は被差別部落出身を知っているか。知らないとしたらいつどのようにして知らせていくか。教師としてできることは何か。
- オ 被差別部落出身保護者としての子供に託す願い、学校への願いは何か。

○話し合い後の職員の感想

- ア 被差別部落出身の方と話ができるだけでもありがたいのに、それが本校の保護者の方であるということでも生きた勉強ができた。
- イ 毎日接している生徒のお母さんとの話し合いで、より身近な意見をうかがうことができて、よい勉強になった。
- ウ 生徒のお母さんたちからお話を聞いたのは、初めての経験なので本当に勉強になった。
- エ 最初は、生徒の保護者ということもあってなんとなく不安もあったが、話し終わった後、今までふられずにきたことにふれることができほっとした気分になった。
- オ 被差別の立場のお母さんたちがきてくれて、同和問題の話が聞けたことをありがたいと思った。
- カ 同和問題に対してとても前向きな考えのお話しであったので、いろいろなことが身構えずに話すことができた。
- キ 被差別部落の人達が、今でも様々な悩みを抱えていることが分かった。
- ク 母親として、子供が将来差別にぶつかったときのことに不安を感じていることがよく分かった。教師として何ができるか真剣に考えさせられた。
- ケ 被差別部落出身を子供にどう伝えるか、だれが伝えるか、学校の先生に伝えてほしいという気持ちをもっている保護者もいることが分かった。
- コ 西中の卒業生の方のお話しは参考になった。被差別部落との出会い、中学校時代の受け止め、周囲の友達の様子など今の中学生を見ていくうえで参考になった。
- サ 生徒を中心にした話し合いをすることができて本当によかった。

○参加した被差別部落出身保護者の感想

- ア 先生方がこの問題を真剣に考えてくださっている様子が分かってありがたいと思いました。最初は緊張ぎみだったけれど、ざっくばらんにお互いが話し合えてよかったです。子供に教えるのは難しい

のでしょうか。子供は今ならあまり考えていないし、言ってもいいチャンスなのかなと考えています。Sさんが子供に話したということなのでどのようにしたか今度聞いてこようと思っっています。

先生方が勉強していた資料の差別ビラを見てショックでした。今もあるんですね。部落外の人が見たら他人事ですが、当事者は悲しいですね。

分町問題が解決してほしいという私の願いは、先生方に言ってもだめだということが分かりました。先生方が町内のことはあまり知らないんだということも分かりました。

イ 他の人（注；被差別部落出身の他の人）の話を聞いてみたいと思っていました。先生方がこの問題を一生懸命取り組んでくれていることが分かりました。せっかくの機会をむだにしないようにしたいですね。

差別ビラの話など私は全然知らなかったので、まだ差別があることが分かりました。自分はあまり深刻に考えていなかったもので、奥が深いんだなあと思いました。勉強になりました。

先生方が分町問題のことをほとんど知らないもので、それにはびっくりしました。

ウ よかったですよ。家に帰って子供に今日のことを話しました。それで、Hさんの子供はまだ出身のことを知らないんだってと話したら、「それはかわいそうだ」と言っていました。理由は差別されても分からないから、結婚するときでもそれが分かったら大変なことになっちゃうんじゃないかとのことでした。やっぱり知っておいた方がいいとのことでした。

先生方は真剣に聞いていました。話しも出してくれました。学校に来てよかったです。担任の先生も聞いてくださったし、前の担任の先生も話してくくださったしありがたかったです。

エ Sさん（注；一緒のグループの保護者）の話しを聞いていて参考にはなったが、家に帰ってよく考えてみるとそんなに意識する必要があるか疑問が出てきました。ちょっと気にしすぎなんじゃないかなとも思いました。家に帰って娘に「ここは同和地区というところなんだよ」と話しましたが、娘は「ああ、そうなんだ」と別に気にしている様子もないので「今まで、そのことで気になることはあるか」と聞くと「友達も知らないし、それで何かあったこともない。かえって教えない方がいいんじゃない」と話していました。そこで、「でも、それで結婚がだめになるかもしれないよ」と言うと「結婚のときに話す必要もないと思うし、その問題でだめになるなら離婚してもいい」と話していました。子供はあまり気にしていませんね。だからあまり教えたりしない方がいいんじゃないかと思います。

主人に話したら主人も同じ考えでした。あまりこだわる必要はないと言っていました。先生方は、なにか聞いちゃいけないのかなという感じで構えていたようでしたね。

オ 私だけ先生方の中で一人だったけれど、いつものように話しができました。先生たちも同和問題との出会いを話して下さって私自身の勉強にもなりました。ただ、私としては、他の保護者の方の話を聞いてみたかったですね。聞けなかったのは残念でした。他の保護者がこの問題をどのように捕らえているか、子供に対してどのようにしようとしているか聞きたかったです。

(4) 被差別部落出身保護者との話し合い・話し合い後の感想から分かったこと

ア 学校が部落差別の解消を目指して、真剣に同和教育に取り組んでいることを分かってもらえた。

イ 被差別部落出身の人たちでも、解放運動に参加していない場合などは、部落差別の現状、具体的な差別の実態等にふれる機会は多くないことが分かった。

ウ 被差別部落出身の人々の中でも、部落差別や被差別部落出身などの話題が出されることは多くないことがわかった。

エ 被差別部落出身の他の人が、部落出身や部落出身を子供にどう教えたらいいか、子供の教育についてどう考えているか話し合ってみたくて考えていることが分かった。

オ 被差別部落出身の受け止めは、それぞれの立場や被差別部落との出会い方、育った環境などにより大きく違うということが分かった。

カ 被差別部落出身を子供に教えている人がいることが分かった。

キ 子供の被差別部落出身の受け止めは、保護者の被差別部落観によって大きく違ってくることが分かった。

ク 被差別部落出身を子供にどう教えたらいいか悩んでいる人がいることが分かった。

ケ 学校の先生と部落問題を話し合えてよかったと考えてくれていることが分かった。

(5) 課 題

ア 被差別部落出身保護者との継続的な話し合いを続ける必要がある。

イ 保護者との関係を深めながら、被差別部落出身生徒と同和問題を話し合う関係作りを進める必要がある。

4 人権に関する作文を通じた保護者との関係作り

(1) 手 順

生徒の人権作文 → 担任が読んで感想を書く → 担任の感想が書かれた人権作文を保護者にわたす → 保護者が感想を書く → 保護者の感想をまとめる → 職員に配付 → 学年部会で保護者啓発に活用

(2) 保護者の感想

○1年 保護者 222名 感想を寄せてくれた保護者 134名

ア 心身ともに成長している様子が作文を読んで感じられました。先生の感想文にも感動いたしました。私の子供のころは祖父母がいましたので、人間関係や生活面で言うてはいけないことや考え方について注意された覚えがあります。明治生まれの母から、小学生の私にそういうことはいけないことだよと諭された言葉は、今も私の心の宝物です。差別や偏見、あつてはいけないことなのになくならない……、悲しいことだと思います。娘にはもっともっとやさしく、広い、大きな心を持った大人に成長してほしいです。

イ 同和教育について家で話し合う機会がなかったので、作文を読んで同和教育に対してしっかりとした考えを持っていることを知りびっくりしています。いつまでもその優しい気持ちを忘れないで成長して行ってほしいと願っています。これからは、家庭で同和教育について話す機会を持ちたいと思っています。

ウ 子供の作文を読んで、自分が13歳のころには考えてもいない、書けないような内容で感心しました。今の子供たちはこのような作文を書ける教育を受けているので、少しでもよい明るい方向に変わってほしいと思います。勉強は高校受験で友達と競争することになっていきますが、他人を尊敬できる人間になってほしいと思います。人が人を傷つける言動は本当に悲しいものです。まずは、それぞれが自分のまわりを見つめ直してほしいと思います。

エ とてもすばらしい考え方の作文だと思います。大人ですらマイナスに考えがちですが、自分に対して

だけでなく、他の人に対してもプラスの考え方で接していったなら、自分の周り、地区の周り、どんどんみんなの気持ちがプラスへ変化していくと思います。親である私も、子供の作文を読み、子供のやさしい考え方に心穏やかになりました。とてもうれしい作文でした。またぜひ読ませてください。

○2年 保護者 197名 感想を寄せてくれた保護者 105名

- ア 私の体験をなんとなく話していて、それが人権の大切さをこんなにも考えていたなんて思ってもいませんでした。人は皆、平等であり、お互い助け合って生きていくことを誰もが願ってくれればという、やさしい心を持ってくれたことをうれしく思います。
- イ 「人は生まれてきたことだけで、十分価値がある」と思ってくれたわが息子に改めて感謝したいと思います。私の方こそ「生まれてきてくれてありがとう」と返したい気持ちでいっぱいです。中学に入って勉強やら部活でいろいろ大変なこと、いやなことがあるかも知れませんが、子供が本来持っている「やさしさ」をこれからも大切にしてほしいと心から願っています。
- ウ 自分の子の作文を読んで、少しずつだけ成長しているなと思い、うれしくなりました。自分が言われたりやられたりしてイヤだと思ったことは、決して人には言わない、やらないことを守ってほしい。人間として一番大切なことは「人の痛みが分かること」だと私は思っています。これができない人は、人の上にも立てないと思います。残り少ない中学校生活はいろいろなことを体験しながら、一步一步社会に出る心の準備をしていってほしいと思います。
- エ ひごろ話すことは毎日の出来事が中心ですので、子供がどんなことを考えているかが分かるわけではなく、この文章を読んで「あつ」と心にとめることができました。「親子なんだなあ」と私自身の反省と、忘れがちなことを思いださせてくれました。また、わたし自身もがんばって生きていこうと思わせてくれました。子供だけ一人の人間なんだなあと考えさせられました。ありがとうございました。

○3年 保護者 199名 感想を寄せてくれた保護者 94人

- ア 大人であっても、親である私は今まで「人権」などということ深く考えることもなく、簡単に使ってきていました。いつまでも子供とばかり思っていたわが子の作文を読む機会与えてくださったことに感謝します。これからは、もう子供ともいろいろなことについてきちんと話ができそうな気がしています。
- イ 小学校高学年になってから、友達のことや悩む姿をみても「何とか自分で乗り切ってほしい。つらくても負けずに強い意志をもってほしい」そう願って見守ってきました。昨日まで仲良くしていたのに、今日は無視されるという状況がしばらく続きましたが、何ヶ月かでみな仲良しになることができました。今では強い心の絆で結ばれた様子で本当にうれしく思います。
- 「今の西中はいいよ！」と娘が話すので、生徒一人一人を大切にする教育がなされているのだと考えております。人権作文を書くことで自分の心の内を改めて知ることになると思います。また、保護者もそれを読むことで、親子のふれあいとともに、家庭の中での同和教育がすすめられることになるので大変よいと思います。
- ウ ついこの間まで子供らしく……などと思っていたわが子ですが、いつのまにかしっかりした考えを持ち、成長した喜びを感じました。人を思いやるやさしさを改めて娘から教えてもらった気がします。
- エ 人権作文を読ませていただきました。「いじめ」「差別」は、ふだんあまり意識しない言葉ですが、子供の作文を読んですばらしい心が芽生えていることに感心させられ、人権教育の大切さを子供から教え

られたような気がします。言われてみれば、現代社会の大きな課題の一つで、国籍、人種、肌の色、宗教、性別、年齢、同和問題、身体障害……等の要因に基づく差別、いじめ、嫌がらせ、最近ではセクシャルハラスメントなど、たくさんあります。これらの問題をなくすには一人一人が個人の人格、個性を尊重し、相互理解し、予断や偏見、差別をしないことが大切だと思います。

健康で明るく個人の能力を発揮できる学校風土づくりを目指すためにも、生徒全員でこの問題を積極的に取り組まれることを望みます。

(3) 成 果

- ア 保護者の西中の教育＝学校同和教育への理解が一段と深まった。
- イ 生徒のことについて保護者と職員が語り合う関係が一段と深まった。

5 課 題

- (1) 学校同和教育の展望を確認した同和教育の継続的实践。
- (2) 特に、被差別部落出身保護者と語り合う関係作りを一層進める。

評

同和問題とは何か、具体的にはどのような形で同和問題が現存しているのか、また被差別部落出身の親が自分の子供に寄せる思いは何か、そして被差別部落出身の親が学校に何を期待しているのか。今、学校においては、被差別体験者との交流等を通して、差別の実態から学ぶ努力をしています。

このような具体的な実践を通して、学校同和教育推進校より被差別部落出身保護者と同和問題について語り合った実践例が報告されましたが、私たち教師の多くはまだ同和問題について語る事がなかなかできないのが現状です。私たちはなぜ同和問題を語れないのか、私たちはなぜ語ることをためらうのか、もう一度深く自分自身を見つめてみる事が大切です。

私たち教師の目の前には、同和問題に関して不安や悩みを抱えている保護者や児童生徒がいます。その保護者と子供をつなぐことができるのは教師であり、また、部落の保護者と部落外の保護者をつなぐことができるのも、そして部落の子供と部落外の子供をつなぐことができるのも教師です。

このような中で、本実践は、「同和問題を語れる教師」を目指して、全職員で保護者と語り合う関係づくりに取り組んでいただきました。具体的には、

- ①教職員の実態把握
- ②同和問題についての学習会
- ③被差別部落出身保護者との話し合い
- ④人権に関する作文を通した保護者との関係づくり

などを実践していただきました。

特に、自校に現在通っている子供をもつ被差別部落出身保護者と直接同和問題についての話し合いを通して、部落の親が子供に寄せる思いは何なのかを、そして学校に何を期待しているのかを知ることができたことは、部落の保護者と生徒をつなぐために重要なことです。このことは、展望をもった保護者啓発を実践されてきた成果です。

西中学校の「同和問題を語れる教師」を目指した実践は、同和問題に関し不安や悩みをもつ生徒や保護者を支え励ますことになり、そして生徒が差別に負けず、強く生きていくことにつながると考えています。今後、部落の生徒を通した高等学校等との連携や、部落の生徒との同和問題についての語り合いなどが課題として考えられますが、今後とも、保護者とのかかわりを通して、同和問題について語り合う関係を深めていくことを期待しています。